Osaka University Knowledge Archive

Title	月経と月経をめぐる経験を通して見る社会 : 高齢女性の語りから
Author(s)	三橋, 涼子; 伊藤, 美穂; 尾崎, 晶代 他
Citation	未来共創. 2024, 11, p. 101-145
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97813
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論文

月経と月経をめぐる経験を通して見る社会
高齢女性の語りから

三橋 涼子　大阪大学大学院人間科学研究科社会学・人間学系人類学研究室博士前期課程
伊藤 美穂　大阪大学大学院人間科学研究科共生学系グローバル共生学地域創生論博士前期課程
尾崎 晶代　大阪大学大学院医学研究科地域ヘルスケアシステム科学研究室博士後期課程
倪 婷婷　大阪大学大学院人間科学研究科共生学系グローバル共生学地域創生論博士前期課程

要旨

現在高齢者である女性たちの語りから彼女たちがどのような月経を経験してきていたのか、そしてそれらの経験を通して形成された、彼女たちの月経に対する思い、社会に関する認識がどのようなものかを質的に明らかにすることを目的に調査を行った。

研究方法としては、70 ～ 80 代の 3 人の女性に対して対面で半構造化インタビューを実施した。その結果、インタビュイーらは月経量に応じて生活を調整し、その時に手に入るもので工夫するなど、状況に応じ自分たちなりに生きてきたことがわかった。生理用ナプキンの登場で便利にはなったが、彼女たちにとっては数多くの便利なもののひとつであり、月経も人生の一部分にしか過ぎなかった。また、月経経験を通して感じた社会に対する思いも聞き取ることができた。このように、インタビュイーの語りから、当時の月経対処や、人生を生き抜いてきた末の彼女たちの月経に関する思い、彼女たちを取り巻いていた社会状況などを明らかにできた。

キーワード

月経、生理、高齢者、タブー、月経観、インタビュー、女性、性、語り、月経経験、性教育

目次

1　はじめに
1.1　はじめに
1.2　先行研究
2　調査概要
2.1　調査方法
2.2　インタビュー内容
3　結果
3.1　インタビュイーの略歴
3.2　初経の経験
3.3　月経に関する認識
3.4　月経による心身、日常生活への影響
3.5　生理用ナプキン登場までの月経への対応
3.6　月経に関する学校教育
3.7　長い人生の中の一部分である月経
4　考察
4.1　初経の経験
4.2　月経に関する認識
4.3　月経による心身、日常生活への影響
4.4　生理用ナプキン登場までの月経への対応
4.5　月経に関する学校教育
4.6　長い人生の中の一部分である月経
4.7　高齢者女性の語りから得られた各分野への示唆
5　結論

u597804b@ecs.osaka-u.ac.jp（三橋）

1．はじめに

1.1　はじめに

近年「生理の貧困」が問題になるなど、月経をめぐる事柄が注目されるようになってきた。本研究の目的は、現在高齢者である女性たちの語りから彼女たちがどのような月経を経験してきていたのか、そしてそれらの経験を通して形成された、彼女たちの月経に対する思い、社会に関する認識がどのようなものかを明らかにすることである。

そして本研究は、人類学、保健学、共生学を専門とする執筆者とする学際的な研究である。高齢者の月経に関する語りから、各分野における示唆を導き出したい。人類学の観点から月経対処の生の語りを残すことの重要性を検討し、月経研究において、ライフストーリーとして月経経験を聞き取ることで、過去を生き抜き現在を生きる女性たちの月経に関する認識等にせまりたい。保健学の観点からは、本調査の結果から学校で求められる月経教育、性教育について検討を行い、新たな視点を得たい。また、月経がようやく徐々に公に語られ始めて、先進技術や医療によって月経経験者の精神的・身体的負担が軽減されるための取り組みがなされているが、それに比較して「過去の月経経験者」の体験や語りは、注目を集めることは少なかった。そこで、共生学的な観点から、我々の先達がどのように関連する知識を身に付けて、受け止めて、対処してきたのかの歴史を掘り下げ、後世に伝えることを本調査の目的とする。

1.2　先行研究

月経は、社会学や医学、看護学など様々な分野で研究が行われてきた。

医学や看護学の分野においては、特に月経の身体的側面に着目した研究が数多く行われてきた（杉田 2022）。量的な研究が多くを占め、日本におけるそれらの研究を大別すると、月経前症候群（PMS）や月経随伴症状に着目したもの（宮澤・富永・土田 2013; 緒方・大塔 2013; 渡邊・奥村・西海 2011）、月経痛に焦点をあてたもの（平田 2011）、統計的な月経の実態や月経対処に関するもの（岩﨑・串谷 2019; 佐藤・斉藤 2010）、月経の経験に関するもの（野田 2003;

甲斐村 2010）や、月経観や月経の捉え方に関するもの（緒方・宇野 2011）がある。

月経に関する質的な研究については数が少ないが、試みられている。例えば、更年期女性の月経に対する認識の変化についての本田と我部山の研究がある（本田・我部山 2016）。本田・我部山は、妊娠・出産の経験がある45歳から55歳の女性6人に半構造化インタビューを行い、更年期の女性が初経から現在までどのように月経を認識していたのかにについて調査を行った。その結果、女性たちそれぞれが月経という経験を通じて女性としての自己の身体に気づき、月経についてそれぞれ意味づけを行っていることが明らかになった。

他には、成人女性の語りに注目して月経経験を明らかにする神谷・谷津の看護学分野からの研究がある（神谷・谷津 2007）。神谷・谷津は20代～40代の女性6人に対して半構造化インタビューを平均40分程度行った。この研究によって、月経を通して女性としての自分の身体を認識し、月経についてそれぞれに意味づけがなされ、肯定的な感情も否定的な感情も共存していることが明らかになった。

医学・看護学系の研究分野以外では、文化人類学や民俗学において、月経の社会的・文化的側面に着目した研究が数多くある。文化人類学では、長年月経について様々な研究がなされてきた。それらの研究の多くは、月経に関する慣習や「不浄」「ケガレ」などの観念に焦点を当てており、月経の対処に着目した記述は少ない（新本 2022）。

これらの月経対処に焦点が当てられてこなかった理由として、新本はまず、月経対処が人目につかない場所で行われていたことを挙げる。他の理由として、BuckleyとGottliebによれば、情報の収集とその解釈において男性優位であったことが挙げられる（Buckley & Gottlieb 1988）。というのは、それまでの調査者の多くは男性であり、さらに現地の情報提供者も男性であった。そして当時の研究は男性に焦点を当て、社会の構造的な理解を目指すものだった（Buckley & Gottlieb 1988: 30-31）。新本は、社会構造主義において、月経がどのような状況で忌避されるのかということや、儀礼での女性の生殖能力の象徴などに注目されるため、研究者たちは、女性たちが実際にどのように月経に対応していたのかに関心が向かなかったのではないかと考察している。（新本 2022）。

BuckleyとGottliebの指摘の後、新本によれば、1990年代のジェンダーの議論において、月経事自体を扱う研究より、初潮儀礼における男女の関係に着目する研究や、初経を起点とするライフステージにおける女性の役割についての研究が多くなった。加えて、1980年代以降のジェンダー研究は、生物的差異に基づいたジェンダーに基づいて議論するのではなく、ジェンダーがどう文化的に構築されるかに注目しており、生理現象である月経は分析の対象になってこなかった（新本 2022）。近年ではこの状況に対し、月経衛生対処（MHM）というグローバルな開発支援の波及もあって、日本国外において、月経がどのように捉えられているのか、また月経にどのように対処するのかを明らかにする研究が増えてきている（杉田 2022; 菅野・松尾 2022）。

歴史社会学においては、田中が様々な文献に基づいて、日本の生理用品の社会史について丁寧な分析を行った（田中 2019）。田中はこれまでどのように女性たちが月経に対処してきたのかという点を、日本で最初の生理用ナプキンである「アンネ」に特に注目しながら、縄文時代まで遡って様々な記録を丹念に整理することで明らかにした。

一方月経教育、性教育に関する研究も数多く行われてきた。日本において社会的状況への課題から様々な研究が行われ、どのような性教育が必要なのかについて検討が行われている（西岡 2018; 松井 2014）。国際的にも、各国の状況から施策を立て、現場で性教育が実施されてきた（Leung et al., 2019）。しかし、各国で行われている性教育では人権とジェンダー平等の観点が不十分であったため、誰も置き去りにされない世界に向けてUNESCOによって包括的セクシュアリティ教育が2009年に提唱され、2018年に改定もされている（UNESCO 2018）。日本においても学習指導要領の『はどめ規定』を撤廃し、国際水準の包括的性教育をベースに整備する必要性も言われている（橋本 2020）。しかし、UNESCOが提唱している教育も性に関して様々な視点が必要である事が示されているが、具体的な教育のゴールや方法が分かりづらく、学習指導要領の整備も難しいことが考えられる。若者の性感染症、妊娠を防ぐための学校での介入に関する国際的なシステマティックレビューでも効果があると認められた介入はみられていない（Mason-Jones et al., 2016）。そこで教育を性教育の視点で捉えた時に、現場の教員は、何を目指し、何をどう教

えるべきか、そして現場の裁量に任されている現状をどのように理解し解釈して、日々子どもたちと関わるべきであるかを本研究から考察したい。

上述してきた多分野の月経に関する研究は、質的研究であっても月経に直接関係することに着目することが多い。そして女性たちが過ごしてきた社会や、実際女性たちがどのようにその社会に対処して生きてきたかに関する視点があまりみられず、そのような研究の蓄積も十分でない。さらに、生理用ナプキンが日本で初めて発売された1961年前後に月経を経験し、月経経験を終えた70～80代の女性が、月経を振り返ってどのように感じ、社会背景がどのようにそれに影響しているかを検討した研究は見られない。人は社会の中で生きており、女性たちが生きてきた社会と月経経験をつなげることで、個人が月経をどのように捉え、月経の経験から社会をどのように感じていたかといった、語りの重要な部分を取りこぼすことなく明らかにすることができると考える。また学校教育と学校教育以外の社会による女性たちへの月経経験及びその認識への影響の検討を行いたい。当時の状況を語りうる女性たちは高齢化しており、彼女たちの構築された月経経験についての語りを残すことは喫緊の課題である。本稿で生理用ナプキンが発売される前の月経経験に関する語りを情報として提供することで、今後の月経研究に貢献できると考える。

2. 調査概要

2.1 調査方法

70～80代の3人の女性（Aさん、Bさん、Cさんとする）に対し、それぞれ対面で、今を生きる高齢者が経験した月経について半構造化インタビューを実施した[1]。サンプリング方法は、スノーボールサンプリングで、筆者の親戚や知人である。月経に関する個人的な体験についてインタビューするため、あえてインタビュアーと近しい関係者を選定した。インタビュー内容について説明後、インタビュー可能か尋ね、同意が得られた人にインタビューを行った。調査時期は、2022年12月～2023年1月で、追加インタビューを2023年10月にAさんとCさんについて行った。

インタビュー対象者に対し、書面と口頭で説明し、同意を得た上で、インタビューの録音を行った。インタビュー後、録音データの文字起こしを行い、コードをつけて質的内容分析を行った。

本研究は、大阪大学人間科学研究科共生学系研究倫理委員会の承認（登録番号OUKS22056）、感染対応の承認（登録番号OUKSC2217OUKSC2217）を得て実施した。

Aさんに対しては自宅のリビングで、Bさんに関しては、ホテルのティーラウンジでインタビューを行い、その場にはインタビューに参加しなかったものの仲介者として、インタビュアーの母も同席していた（表1参照）。Cさんに対するインタビューは、Cさんの自宅の台所のダイニングテーブルで行った。AさんとCさんについては、分析の際、再度確認したい内容があったため、追加インタビューを行った。Cさんの追加インタビューについては、初回インタビューと異なり、Cさんの娘である調査者が行った。

表1　インタビューを行った場所や状況、インタビュアーの関係性

	Aさん	Bさん	Cさん
場所	Aさんの自宅リビング	ホテルのティーラウンジ	Cさんの自宅台所ダイニングテーブル
インタビュアーとの関係性	祖母（2年ほど同居）	母親の元同僚（家族ぐるみの付き合いで幼少期からの知り合い）	クラスメイトの母（初対面）
インタビューの状況	1対1	インタビュアーの母親が同席	インタビュー対象者の娘（インタビュアーのクラスメイト）が同席

2.2　インタビュー内容

高齢女性に聞きたいことを話し合い、質問項目を決定した。人生経験が月経の認識にどのように影響しているか、生理用ナプキン登場前の月経への対処はどのように行っていたのか、月経に関するタブー・慣習に関する生の声、月経に関する情報を誰からどのように受け取り、どのように感じたか、など、興味のあることを挙げ、各インタビュアーが同じカテゴリーでインタビュー

を行った。インタビュー内容は表2のとおり5つのカテゴリー、①対象者の人生背景②月経経験③生理用品④慣習・文化⑤教育にしたがった。本稿では分析にあたり⑤慣習・文化を②の月経経験に加え、4つのカテゴリーにした。

表2　質問項目

カテゴリー	質問内容
①対象者の人生背景（誕生から現在までの大まかな歴史）	誕生日や生誕地。学歴・職歴（月経のある時期にどのような社会的役割を担っていたのか）、家族背景、出産歴とその時の本人の年齢、初経・閉経の時期。
②月経経験	月経についての言い方、量・日数（他の人と比較していたか、他の人と月経の話をできたか）、月経に関する症状、その軽減や緩和させる方法の実施の有無、月経や婦人科系トラブルの際の医療機関の受診歴
③生理用品	月経の時は、どのようなものを使っていたか。経血量による生理用品の使い分けの有無、使い心地、漏れへの対応、仕事や生活への影響、家庭での保管の仕方、持ち運び方、洗い方、干し方、廃棄方法、生理用品の購入先、購入方法、商品としての生理用品が販売された時どう思ったか
④慣習・文化	月経中にしてはいけないとされていたこと、月経中に避けていたこと、タブー視、初潮儀礼の有無とその理由
⑤教育	月経についてどこで、いつごろ、誰から、何について教わったか、娘には月経について教えたか、教えたならいつごろどのように、息子への月経に関する話（男の子供に月経を教えることをどう認識しているか）

3．結果

45分から1時間程度のインタビューから語りを得た。語りは、筆者らが作成した逐語録から、繋ぎ言葉の削除など一部修正した。以下、語りをカテゴリー順に内容ごとにトピック名をつけて記述する。月経経験（初経の経験、月経に関する認識、月経による心身・日常生活への影響）、生理用品（ナプキン登場までの月経への対応）、教育（月経に関する学校教育）、全体を通して（長い人生の中の一部分である月経）とする。

3.1　インタビュイーの略歴

調査者の家族2名、職場の関係者1名の計3名の女性である。インタビュイー（インタビュー対象者）をそれぞれAさん、Bさん、Cさんとする。語りからインタビュイーたちの略歴を整理した。それぞれの略歴は表3の通りである。

表3　インタビュイーの略歴（人生背景）

	Aさん	Bさん	Cさん
現在の年代	80代前半 （1940年前半生まれ）	70代前半 （1950年前後生まれ）	70代前半 （1950年前後生まれ）
生誕地	鹿児島県	福岡県	福井県
学歴	高等学校	高等学校	短期大学
職歴	高校卒業後、2年間、事務仕事に勤務。 その後第1子出産まで経理事務に7年間ほど勤務。	九州から上京し、客室乗務員として3年ほど勤務。	乳児園、幼稚園で数年勤務。結婚退職後、専業主婦。
実家の家族	父、母、2人の姉、4人の兄。 父は警察官、母は宮崎出身で、裕福な家の出身。 姉2人は生まれてすぐ親戚に養子に出された。長兄は戦死。	父、母、姉、弟	父親は自営業（建築資材関係）、母親は専業主婦 、兄
出産歴	2子 女（27歳時）、女（30歳時）	4子 （男2人・女2人）	3子 （男、男、女）
初経	高校1年か2年	小学校6年	中学1年
閉経	50歳ぐらい	40歳	52～53歳

―月経経験―

3.2　初経の経験

まずは初経の記憶から記述する。

Aさん：（初経は）高校に行ってからやな。（中略）覚えてへんけど1年か2

年ぐらいちがうか。

Bさん：この日ね、あの学校で学芸会だったんです。（中略）ちょっと初めてのことなんで。自分もやっぱり少し興奮してますよね。そういうことに何があったかとかで学校をお休みしました。

Cさん：私が月経初めてなった時は、学校だったんだよね。（中略）最初は誰しも、知識としてあっても、現実やったらびっくりしますよね。その時、同級生のお友達が、トイレのとこで教えてくれたというのが記憶にありますね、私は。その子の方が（初経が）早かったんですよね。

Aさんは記憶が曖昧な一方、Bさん、Cさんは鮮明であった。Bさんについては、初経の時期を担任が把握していたという。

Bさん：私、その時160（センチメートル）あったんです、身長が。で、私より、小さい人たちはもう5年生6年生で、みんなクラスの子が始まってたんですよね。で、男性の先生ですごい気にしてたんです。私の（方）が、体が大きいのに来ないもんだから。

聞き手：自分たちの担任する子供達に（初経が）あったか、ないかを？

Bさん：把握してましたねえ。知ってましたね。（中略）あの6年生で修学旅行、行きますよね、一泊の。だからたぶんそれも先生にとって不安だったんじゃないかなと思うんですよ。

インタビュイーたちは、初経について次のように認識していた。

聞き手：（赤飯[2]を炊いて）何をお祝いしてるんやと思う？

Aさん：女になったっていうことや、子供が。もう大人になった（って）言うのかな。

聞き手：大人になったっていうのと、女になったっていうのは、若干同

じようで違うようなとこもあると思うねんけど、どっちの意味合いが強かった？

Aさん：それは女やろな。成人式があんのやから。生理って言うたら、ほら女や。

聞き手：出産ができるようになったってことをお祝いするってこと？

Aさん：そうやろな。

聞き手：赤飯は家族で食べるってことやんな？

Aさん：そやな。無事に成長したっていうあれやな。

Bさん：家族がね。めでたいことだからって言うので。[3]

Cさん：（子どもに月経が始まった時について）赤飯を炊かなあかんなあ、みたいなんで、赤飯炊いたかね。それぐらい。なんかめでたいことなんかなあ。

三者の共通認識として、初経はめでたいもの、祝うものとの認識であった。初潮儀礼については、全員、赤飯を炊いて祝うものだと捉えていた。

Bさん：昔ね、初潮を迎えたときに、お赤飯炊いてくれたんですよね。

Aさん：（初潮儀礼は）なかったよ、（中略）自分のときは。そやけど、[Aさんの次女]とか[Aさんの長女]の時は（赤飯を炊くのを）したよ。（中略）

聞き手：それは、みんながしてたからした？　それとも赤飯って、お祝い事のやつやし、自分で（考えて）した？

Aさん：なんとなくそういうことをするのやっていうのは、わかるやんか。（中略）

聞き手：でもさ自分のお母さんには、炊いてもらってへんかったやんか。それは、何で（娘には）炊いたってなったん？

Aさん：なんとなくそういうのが、やっぱりこうするもんやっていうのは、

どっかからか（情報が）入ってくるんやろな。

聞き手：初潮の儀礼（はありましたか？）。お祝いのために。
Cさん：そんなのなかったですね。（中略）

このように認識は共通だった一方、実際に自分の初経時に赤飯が炊かれたかは人によって異なった。AさんとCさんは、自分の時には赤飯を炊いてもらっていなかったが、娘には赤飯を炊いていた。

Bさんは、初潮儀礼として、初経が来た時、母親に「おまじない」をしてもらった。

Bさん：初経がきた時に母が、昔はあの和式のトイレだったんですよ。…「生理が軽くすみますように」って、（トイレの）跨ぐところを一回二回、三回「軽くすみますように、軽くすみますように」って（言いながら）三回やりなさいって言われてそれしました。おまじないで。（中略）昔はボットンだからね。往復を。

また、Bさんは、初経が「区切り」になっており、初経が始まっていた友人に「仲間入り」したことに安堵を感じていた。

Bさん：やっぱり、それ区切りがついたなって感じで、もう周りがみんななってたから、うん。仲がいいお友達も始まってたから、あーやっと仲間入りって感じ。

3.3　月経に関する認識

次に、月経に関する認識についての語りを記述していく。まず、月経をどのように日常生活で表現していたのかを尋ねた。Aさんはそもそも月経について口に出さなかったということを語った。

Aさん：（月経のことを）言わへんかったんやろうなあ。（中略）あんたやら、

言うの？　今日生理やねんとか言うの？

その上で、Aさんは生理用ナプキンが登場するまでは「生理」と表現し、生理用ナプキンが登場してからは生理用ナプキンの商品名で月経を表現していた。

聞き手：生理についての言い方。ずっと「生理」って言ってた？
Aさん：そやな「生理」やな。
聞き手：そうなんや。「アンネ」とか「メンス」とか言ってた人もいたけどそれは知ってたん？
Aさん：うん。だいぶしてから「アンネ」って言うてたな。

Bさんは、他に、「毎月のもの」、「お客様」とも表現することもあった。

Bさん：その時[4]から「毎月のもの」はありません。
Bさん：家では「生理」って言ってたけど、お友達同士では「お客様」って言ってました。「月に一度の「お客様」が来た」、って。（中略）「私はお客様だから今日はプールに入れない」とか。

月経の認識に関して、月経のときにしてはいけなかったこと、避けたことを質問事項として尋ねた。それらが以下の語りである。この質問の答え以外に、タブーや憚られることはインタビューを通して度々言及されていた。

Aさん：あんまりそういう生理の話はタブー視されてやな。（中略）あんまりしてないね。覚えがない。

聞き手：口に出して（月経について）喋るのはタブー？
Aさん：そうそうそう。
聞き手：じゃあ性交とか、そういうことの知識はどこで得てた？
Aさん：いやいや教えやーらへんよ、そんなこと、学校でも学校の先生でも。もうほんまにタブーやからな、性に関して口に出すいうこと

はな。（中略）

聞き手：じゃあそういうところは、お友達からか。でも生理の話はせーへんかったんやな。

Aさん：いや、せーへんなあ。田舎やからな。生理のときはな。田舎はなおさらタブーやな。

聞き手：おばあちゃんも、おばちゃん（の年齢）になったぐらいやったら、（生理のことに関して）うわー（大変だ）とか言ってたりした？

Aさん：そんなん人に絶対言わへんかったけどな、生理でどや（どう）とか、こや（こう）とかいうのは。

聞き手：そういうのは、恥ずかしいからとかじゃなくて、しきたりやと思ってたから？

Aさん：そうそうそうそう。田舎で大きくなってるからや。

このようにAさんは、月経の話や性の話について、口に出してはいけないタブーであると認識していて、羞恥心によるものではなく「しきたり」によって話題にしなかったと話している。さらに自分が田舎で育ったためにタブーの度合いは強いと認識していた。Bさんも、月経は「話題になる話」ではないと感じている。

Bさん：（長い付き合いの同性の友人と月経の話をしたことはあまり）ないですね。（中略）話題になる話じゃないかなって感じで。…私が生理が無くなったっていう時に「まあもうないのよ」っていう感じで、ものすごい親しい人でも聞かないよね。もう生理どう？　とか聞かないよね。

Bさん：（オープンなスペースで言ってはいけないというのは）やっぱり不浄っていうのがあるからねえ。うん、シモの話だから。

聞き手：不浄、下の話。

Bさん：うん。

聞き手：そういうところから来てると思いますか。シモだから。

Bさん：だってお産も結局そういうことでしょ？　違うとこで生まされてたとかね。神聖な物なのにね。お産と関わりがある事ですから。結局これ排卵のためのあれだからね。男の人にはないことだから、昔、男の人がその女性を差別するので、そういう時はちょっとほら自分の目からね、見えないところでって。いうことで男の人の社会からですよね。実は女の人って別にみんな。これ、普通のことだから。別に不浄でもないし。

聞き手：今でも残ってると思いますか、タブーは。

Bさん：残ってるんじゃないかなあ、そりゃ。

「違うとこで生まされてたとかね」という語りからは、Bさんが産小屋の存在を知っていたことを示唆している。同様にCさんも月経の話を他人としなかった。

Cさん：その時代の同級生とかに、体育を休むとかいうのはあったけれど、あんまり細かくみんなそこまで話さないね。

聞き手：女の子同士の間にも話さないんですか。

Cさん：生理の話ね、そんなあんまりしなかったね。それぞれ痛いとか大変な時、親に話したり母親に話したりしたんかしらね。そこまで突っ込んだ話を（同級生と）した記憶がないんだけど。

Bさんの担任は生徒に初経があったかを把握していたが、それをBさんの母親は良く思っていなかった。

聞き手：（初経が）来たら私来ましたって先生に言いに行くシステムですか。

Bさん：…それはよくわからないんですけど、聞かれて、それを母にね、言ったんですよ。先生にまだかって聞かれたって。ちょっと母がね、あんまりいい顔してませんでした。それに関しては。

3.4　月経による心身・日常生活への影響

月経による心身への影響に関する語りを記述していく。AさんとCさんは月経時の体調がそれほど悪かった記憶はなかった。

Aさん：（月経の時）体調悪くなかったんやろうな。（中略）おばあちゃんは、そんな記憶はあんまりないわ。

聞き手：月経とか、その婦人科系のトラブルとかで、お医者さんとか行った？

Aさん：いーや、そんなん、かかったことないよ。

Cさん：生理痛で困ったことはなかったですね。我慢できないとか、寝込むとかいう人もいるじゃないですか。そんなのなかったですね、私は。1週間生理来たなということで対処して、そんで、だんだん終わりが少なくなるじゃないですか。終わったなということで、生活は別に変わらないです。

Bさんは、月経痛があった日も、社会活動を休まなければならないほどではないと感じていた。

Bさん：生理だから（体育が）できない、というほどの体調じゃない…やっぱりしんどくないし、もう普通に生活できる。生理だからなんか体がだるいとかお腹が痛いとか、一日だけかな、2日目ぐらいがちょっときついぐらいで。でも練習できないほどではなかったし仕事も休まないでやってましたけど。

Aさんは、自分が経験してきた月経と、現在の人が経験する月経は異なるという認識をしていた。

Aさん：（月経随伴症や更年期障害について）今の人、多いやん。

Aさん：（自分の月経の周期は）必ず（規則正しい）周期できたんやと思うんで。今の子は、あったりなかったりとか言わはるやんか。野生に近いからやな、（自分の昔の）生活が。

聞き手：（脱脂綿などの昔の生理用品について）自分も大変やったし？蒸れた？
Aさん：蒸れたやろうなあ、そらあ。
聞き手：覚えてる？　あんまり覚えてない？
Aさん：覚えてないなー。
聞き手：覚えてないか。かゆかったりした？
Aさん：そういうことはなかったねえ。
聞き手：かゆくはなかったん。
Aさん：うん。昔の子はだから、丈夫やったんや。
聞き手：そうかもな。高校とか、仕事とかしてるときは、生理でも全然支障なかった？
Aさん：うん。
聞き手：そうなんや。なんか生理が重い人もいるやんか、やっぱり今だけじゃなくて昔も。そういう、休んではる人とかいた？　まわりに。生理とは言わーらへんと思うけど、何か、月の決まった時期に、何か周期的に体調崩さはるな、みたいな人っていた？　あんまり？
Aさん：あんまり。あんまり知らんな。…みんな強かったんや。

Aさんは、現在の人は月経随伴症状が多い一方、昔の人は、現在のような生理用品がない中でも「丈夫」で「みんな強かった」との認識を持っていた。Cさんも自分に月経があった時代と現代は異なるという認識を持っていた。

Cさん：やっぱり時代の変化というのは、すさまじいものがあるんですよね。だから、我々の若いっていうか、そういう生理が始まった時代というのは、すごくのんびりしてたんですよ。デジタル化して

ないし、すべての面でのんびりしてたんですよね。おもちゃが山ほどあるわけでもなし、パソコンを触る時代でもなし。
だから、逆にいい面もあるし、今から言えば貧困状態の国で悪い面もあるけれど、両面あるんかな、時代とともにいい面で。
いい面で、便利になってきた反面、便利さで当たり前になる。悪い面で当たり前になる。

次に、月経による生活への影響についての語りを記述する。Aさん、Bさんに関しては、月経が生活へ及ぼした影響は特になかったと話していた。

聞き手：避けてたことはある？　激しい運動とか、そんな感じのことは。
Aさん：激しい運動をすることもないもんな、日常的にな。だから生理が来たからどうのこうのいうことは、何にもないわな。

Bさん：あんまり無いですね。私はもう普通に生活してたから。特にその時だから、何かをいつも生活と違ったことはなかったです、同じように。

月経時の体育も、Aさんは休むことはなかった。

Aさん：それ（生理）で、体育の時間を休むっていう人、一人もいなかったね。
聞き手：え、体育の時間休まはる人やーらへん（いなかったん）かったや。
Aさん：生理の時の、あの不自由な物品（おそらく脱脂綿）に対して、ものすご不自由やんか。そやけど、生理で休みますっていうようなことは無かったし。おばあちゃんの時水泳がなかったから。

Bさんは先ほど記述したように、「生理だから（体育が）できない、というほどの体調じゃない。」と述べており、Aさん、Bさんは体育の授業は休んでいなかった。Cさんについては、生理痛で困ったことはなかったという話をした一方で、 体育を休んだり、激しい運動、性交渉は控えたと話

した。

Cさん：体育を休むとかいうのはあった。

Cさん：体育だけ休む。
体育、そうそうそう。ごめんごめん。学校は休まない。

Cさん：体育休んだっていうことも含めて、激しい運動をちょっと控えるとか。結構違和感があるじゃないですか。だから元気はつらつ、動き回ることもしないですよね。

Cさん：セックスはしないようにということで、それは避けるようにしたり

Bさんは、月経時の入浴への影響を語った。浴槽に入浴することへの他者や自己への影響の認識から、月経時は数日間お風呂に入っていなかった。

Bさん：今はねシャワーがあるでしょ？　だから生理中もお風呂には入れるよね。昔はね、家族のみんな入るでしょう、次から次から。だから最初に入れないよね、やっぱり。でも後に入るとまた不潔。だから、生理の時には何日間か入れなかった気がする。
聞き手：月経中にしてはいけないことっていうこと？
Bさん：生理中には全部（の期間）入ってないわけではないけど。最後の方はね、入るけど。二日くらいは入ってないと思う。不潔だけど。今はシャワーでさあ、いいけど。（中略）
聞き手：真冬でも結構バレーボールで激しく汗かいて、とかなっても入っていない？
Bさん：うん、入ってないと思う。夏はね、汗かくから、あのそれこそ水被ったり、行水、上からこうやって。中にドボンと入ることは私してない。最後もね、何人か入った後のお風呂に入るのもちょっとね。

多い日ね。2日がきついから、2日から3日ぐらいだね。4日目ぐらいが量が少なくなるからアレ（風呂に入る）だけど。（中略）

聞き手：東京では、一人暮らしですね、その時。

Bさん：お風呂屋さんに行ってましたよ。やっぱり2日か3日入ってない。ひどいときは入ってないわ。だってわかるじゃない、風呂入って流れて、血が。でシャワーができたもんね、会社にね。 シャワールームを作ってください、作ってくださいって、みんなでね。

―生理用品―

3.5　生理用ナプキン登場までの月経への対応

この節では、生理用ナプキンが登場するまで、インタビュイーたちがどのような生理用品を使ってきたかに関する語りを記述する。

聞き手：高校生ぐらいのときは生理用品、どんなん使ってた？

Aさん：それこそほんまにカット綿（めん）や、カット綿。（中略）これぐらいに、こんな綿（わた）が入ってるやんか、袋にあんねん。それが切ってあんねん。

聞き手：あの、コットンみたいな？

Aさん：うーん、コットン。綿（わた）やな綿。

Bさん：脱脂綿でティッシュをあの落とし紙みたいな四角いのがあったんですけど、それをハンカチで包んで、持って行くみたいなことは、保健の先生が教えてくれました。

Cさん：生理用品はね、その時代は普通の綿（わた）が切ってあるこれぐらいの綿がずっと重なってあるんですよ。使う分だけ取って、その黒のパンツの中に入れて、生理に対応してたんだけれど。

経血の対処として、綿（わた）を下着に当てていたことは全員に共通していた。Cさんが話したように、ほかの二人も月経時の下着として、股の部分がビニール製になっている黒いパンツを使用していた。

Aさん：黒いので、ビニールみたいなビニール製の黒いパンツがあって。

Bさん：生理用のちゃんとパンツがありましたけど、サニタリーって言うけど、今のあんなサニタリーじゃなくて、もうちょっとゴワゴワしたやつ。ゴムみたいのが入ってて、滲まない。
聞き手：その部分だけがゴム、それ以外は？
Bさん：ゴム。それ以外は綿（めん）で。黒で。

Cさん：黒のブルパンツのショーツの中にビニールが敷いてあって。（中略）使う分だけ取って、その黒のパンツの中に入れて、生理に対応してたんだけれど。

「黒いパンツ」の洗濯について、AさんとBさんは次のように話した。

Bさん：手で洗ってましたね。やっぱり他の洗濯物とは分けないとね。

Aさん：田舎でもやっぱりあれやろな、人目につかんようには、（「黒パンツ」を）干してたんやろな。…しつけされてたん（と）ちがうか。（中略）それが当たり前っていうふうになってたと思うよ。田舎のしきたりとしてな。全てしきたりや、代々。洗濯の干す順番かって、しきたりがあるやん。

Aさん：みんなの家のも（自分の家のものみんな）洗ってたわさ、女の子やから。

Bさんは、他の洗濯物と分けて手洗いしていた。Aさんは、人目につかないように干していて、それは「田舎のしきたり」によるものだと認識していた。また女子であるから洗濯をしていたという認識も持っていた。

―教育―

3.6　月経に関する学校教育

次に、月経に関する教育についての語りを記載していく。BさんとCさんは、宿泊行事前に月経教育があったことを記憶していた。Aさんは宿泊行事は小中高とあったが、その前に月経教育があったかどうかは覚えていないという。

Bさん：5年生のときに林間学校が始まるんですけど、その時に女の子だけ集めて。（中略）そういう話は、例えば、ナプキンっていうのは昔はなかったんですけど、脱脂綿で、ティッシュを…あの落とし紙みたいな四角いのがあったんですけど、それをハンカチで包んで、持って行くみたいなことは、保健の先生が教えてくれました。（中略）（普通の脱脂綿を落とし紙で）くるんで、それをそのまま持っていくと不潔なんで、ハンカチかなんかに包んで、一回分として持ってましたけど。（中略）（林間学校でもそれを）持って行くんですよね。私は（月経が）始まってその時はなかったけど。で始まっている人たちは、それを何個か持ってきなさいって言われて。だから私は一応母に、いつどこで始まってもいいようにってことでセットで持って行ってましたけど、中に持ってこなくて始まった人もいましたから、その人に貸してあげたりしました。持ってたのを。

Cさん：前後すると思うんだけれど、6年になると修学旅行ってあるじゃないですか。修学旅行の前に女だけ別の部屋に呼ばれて、生理っていうものを先生がこうだこうだということでお話してくださって、それがスタートですよね。旅行中に生理になったら困るからということで、そういうお話がありました。（中略）（もし旅行中に生理になった時は）やっぱり先生も引率の先生がおられるから、どんな話だったかは遠い昔の話で、ちょっと用意して行ってたのか、先生が用意して行かれたのか、ちょっとよくわからないですけれど、女性はこういうので生理があるから旅行の時こうだった

らちゃんと言ってくださいみたいな感じじゃないかなと。

月経の教育内容と方法に関しては、次のような語りがあった。

Aさん：生理があるっていうのは、学校が教えはったな。ほんで、みんな黒パンツを買うたんやからな。学校で販売しはったんや。中学校の時に。
聞き手：へえ。
Aさん：保健の先生がな。
聞き手：じゃあ、女の子だけ集められて？
Aさん：そらそうや。

Aさん：かわいらしい女の先生が教えはった、言わはったと思うわ。

聞き手：（学校で教えられた）生理についての話はどんな感じ？　私のときは思春期には男の子と女の子は、それぞれの成長の変化があります。その中で生理というものがあって、生理についてちょっとみんなで教えるから、女の子だけ集まってくださいって感じやってんけど、そこは教えはった？　学校で。男の子はこういう変化があります、みたいな。
Aさん：うんうんうん。最低限教えはったと思うで。

聞き手：保健の授業では黒パンツを買わされたのと、こんな感じでカット綿を当てるんだよって教えてくれはったわけ？
Aさん：うんそうそう。
聞き手：お母さんから、教えてもらったとか、そういうのはなかった？
Aさん：それはなかったな。

このようにAさんが受けた教育は、中学校で女子だけ集められ、女性の保健の先生から、「最低限」月経のしくみと経血の処理の仕方について教わったと

いうものであった。次はCさんの語りである。

Cさん：（学校で教えられた内容は）ちょっと基本的なところだと思うんですけれどね。

Cさんは、学校での教育は月経について基本的なことであったことを踏まえ次のように話した。

Cさん：だからそれ（月経）は赤ちゃんを産むための準備段階で、人間として尊いことなんだっていう、そういう教育っていうのはしてないんですよね。（中略）（当時は）なんとなく、尊いことなんだっていう意識はなかったと思いますよね、大事なことだと。それはこの年になって思うことで、やっぱり男女とか区別しないで、やっぱり人として、男の体、女の体として、それは変化あるのは、人間として自然の姿だし、その形で、やっぱり次の世代を生み育てていく、尊いことなんだっていう、そういう意識が、その時代、教育の中で行われていれば、ちょっと感じが違ったかなって。でも時代とともに、そういうようになってきてほしいなと思ってますね。

Bさんは育児中アメリカに住んでいた経験があり、その時子どもが受けた月経教育について話してくれた。

Bさん：三番目、次男なんですけど、ちょうどその5年生、6年生に当たる時にアメリカにいたんですよ。その時に子供がどうやって生まれるかっていう話で、生理の話が入りますよね。女の人がこう生理があるって。男の子にくることはないけど。 こういう話をしますから、子供に対してOKを出しますか？　出しませんか？　ってね、親にそういう問いかけの手紙が来たんです。で私は、親がね、説明するよりもみんなと一緒に聞いてもらった方が

良いかなと思ってお願いしますって、オッケーを出したんですけど。 嫌だって親もいるわけです。だけどその5年生になった頃かな。それは保健の先生が一緒にやりましたね、女の子も男の子も。女の子の体の構造はこういうのだから子供が生まれるから生理がある。男の子はこういうことだけど、夢精みたいのがある。そういうのもお互いに理解し合う。

3.7　長い人生の中の一部分である月経

この節では、カテゴリー分けに準ぜず、インタビューから見えてきた、月経は人生の一部分であるという視点から語りを集めた。まずは、月経や性について話すことについて焦点をあてたい。Cさんについては、次のような語りがあった。

聞き手：月経中に避けていたことは。
Cさん：セックスはしないようにということで、それは避けるようにしたり（中略）体育休んだっていうことも含めて。

このインタビュー時、Cさんの実の娘も同席していたが、「セックス」という言葉は躊躇なく出てきた言葉であった。Aさんは月経教育について話していた時に、自ら「性交」という言葉を使用した。

Aさん：それこそ、ほんまにもうちょっとちゃんと今の（教育は）、性交とかいうのも全部教えはるやろ。そやけど（昔は）全然教えてないからな。

聞き手は、同居している肉親であったため、躊躇や羞恥心を一切みせずにAさんが「性交」という言葉を使用しはじめたことに驚きを感じた。「性交」という言葉は上記の語りが初出であった。

また、Aさんにとって月経について話すことは、次のように感じていた。

聞き手：生理のことはオープンに喋りましょうとかいう話あるやんか。それはどう思うの？
Aさん：いいのちがうか。別に隠さんならんこともないしな。
聞き手：おばあちゃんやったら（オープンに）喋る？　喋らへん？
Aさん：喋らへん。（即答）
聞き手：そっか。
Aさん：喋らはる人は喋ったらええ。

次に、70年80年と人生を生きた中での月経についての認識に関する語りを記載する。

Cさん：みんな頑張って生きていって、その月経は生活の中に10%、5%くらいの割合しか占めてないから、たぶんみんなは日常生活の中にあんまり気付かないかなと私は感じてます。

このように、Cさんは生活で月経の占める割合はそこまで大きくないと感じていた。一方、Aさんは次のように話した。

聞き手：生理に関して、何か社会は、ちょっと（対応が悪い）って思ってた？それとも、こんなもんやろって感じ？
Aさん：全てこんなもんやろうという感じやな。性格やな。おばあちゃんの性格は、わかるやろ、あんたも。なるっていうのが、おばあちゃんの主義やからな。
聞き手：じゃあ特に不満もなく？
Aさん：生理に対してか？
聞き手：（生理）もやし、変な話、男の人はこうやって、苦労することもないやんか。
Aさん：そういうことを考えたことはないわ。
聞き手：そっかそっか。生理現象の一つやって感じ？
Aさん：そうそうそう。

聞き手：ちょっと、頻尿みたいなそんな感じのレベルと一緒？
Aさん：そうそうそう。

聞き手：あんまりおばあちゃんにとって、生理あんまりいいもんじゃなかったって感じ？
Aさん：そやなあ。
聞き手：面倒？
Aさん：面倒は、面倒やわなあ。
（中略）
聞き手：それは、煩わしいって感じやんな。
Aさん：煩わしい。
聞き手：いろいろやらなあかんことが増えてみたいな。
Aさん：うん。

このようにAさんにとっては、月経は生理現象の一つであり、ニュアンスとしても、まあ「面倒は、面倒」程度であった。

Aさん：人間、その自然に対して、あれがないわな、昔の人ってさ、…だから死ぬのでもものすご簡単や。お医者さんが来はるわけやなし。「おばあちゃん寝込んだはるんやんて。今日でな、おにぎり食べんようにならはってから3日やて。」「あ、そろそろやな」って言うてそんなもんや。...医者に診てもらうこともなしな（ないしな）、ほんまに。自然のまんまの生活やな。生理に対したって。だから隠すとか隠さん（隠さない）とかじゃなくて。

Aさんは月経を「隠すとか隠さん（隠さない）」ことではなく、生理現象のひとつであると認識していた。

次に、生理用ナプキンの登場が技術進歩の中の一つとしてのものだったことがわかる語りを記述する。

Aさん：（生理用品の洗い方について）洗濯機はないし。洗濯板で洗って。井戸水やしなあ。だからあれやん、そういうのを知ってるから、今はあれ（水道）やん。ひねったらお湯が出てくるっていって、おばあちゃんがいつもいうやろ。

聞き手：うん、言う。

Aさん：そういうの、あんたら生まれたときからもうそれで慣れてるから、どうっちゅうことないけど。おばあちゃんらにしたら、なんと素晴らしいあれ（技術）やと（思う。）お湯が出てくるからなあと思うで。それこそ頭洗うのにもな、シャンプーリンスとか無かったから、椿の実を石で叩いてやな、ほんで油にしてやな。全部そんなもん、自分らで作ったんや。

Cさん：徐々にやからね、あんまり意識はないんだろうけれど、全ての面で生理用品だけじゃなくて、全ての生活が便利になってきてるじゃないですか。徐々にね。その中での一つやから、自然の流れの中で、（中略）、どんどん便利になってきてるじゃないですか。そういうような感じで、ああ、こんなの出たんだー、これ使おうっていう感じになったりするんですよ。…本当に便利なものを使って、自然の流れの中で生きてるんだろうね。（中略）そういうような感じで、ああ、こんなの出たんだー、これ使おうっていう感じなんじゃないかなと思いますね。

生理用品が充実していない当時でも、月経に対して自分なりに対処してきたことがうかがえる語りもあった。

Aさん：（当時の生理用品のカット綿の使い心地は）気持ちは悪いしなあ。

聞き手：ちょっと動きづらいなって感じ？

Aさん：そりゃあ、あったと思うよ。めっちゃ悪かったと思うわ。今の生理用品と違うんやから。ようほんまに乗り切ってきたなと思うな、昔の女の人はな。

聞き手：そのバレーボールなんですけど、その落とし紙で巻いたもの、あっという間にずれたり、ポロって落ちること、なかったでしょうか。

Bさん：落ちること。あの昔ね、みんなブルマみたいのを履いてたから。ブルマだから。ここにゴムがあるんですよ。だからずれることがあったけど、ちょっとね、あの漏れるとかはあったけど、でも黒いブルマ履いてましたから、その時は。

聞き手：では、そんなに気にせず。

Bさん：うん、気にせず。

Cさん：生理始まる前がちょっと精神的にイライラするとかあるじゃないですか。心の変化っていうのはあると思う。もう私忘れたけどね。そういうのあるから、やっぱり自分の体と向き合いながら、それなりにやってたんじゃないかなと思います。

インタビューする中で、インタビュイーのこれからの社会への願いが垣間見えることもあった。

聞き手：じゃあ、性交とか、そういうことの知識はどこで得てた？

Aさん：いやいや教えやーらへんよ、そんなこと、学校でも、学校の先生でも。（中略）だからやっぱり、教えなあかんわな。うん、失敗してる子っていっぱいいるからな。

Cさん：トータル的に、人間の成長とか、人間の尊厳とか、そういう部分で、みんなが一緒に、男子も女も男も考えられるような、理想なんだけれど、そういう社会であってほしいなってね。それは、生理とか、自然のことなんだけれど、そういう社会であってほしいなってね。それは、生理だけに関わらず、ジェンダーの問題とか、いろいろあるじゃないですか。だからそういう風にオープンに、話し合える社会であってほしい。

それは、結局大きなことに言えば、平和にもつながるし、相手を理解するとか、違った自分より相手のことを意識するとか、理解するとかにつながっていくので。
やっぱり、なかなか現実はね、主人とも生理の話とか、具体的にそんなのしたくないじゃないですか。自分は自分で処置するとか、自然の流れでね。
でも、人としての大事なことを大切に思える社会というか、そういうのの一環として、生理があれば、生理の話もあれば、お互いにね、いいかなと思ったりするんですけれど。命がね、それで育んで、命の大切さですよね。（中略）
みんなで違った異文化というか、そういうのも話し合える社会になってほしいなって、それの一環として、生理とかそういうのもあったらいいかなって。

4　考察

本インタビューの特徴として、インタビュアーがすべてインタビュイー対象者と同性の女性であり、話しにくい可能性のある月経についてのインタビューには答えやすかったことが考えられる。Aさんには1対1で直系の孫がインタビューを行ったこと、Bさん、Cさんについては親しい間柄である同席者がいたことにより、より話してあげようという気持ちや、理想的な回答をしたい気持ちなどが働き、全く面識のないインタビュアーが実施した場合に話す内容と異なっている可能性がある。

4.1　初経の経験

初経経験についての記憶は、インタビュイーによって鮮明さが異なった。BさんとCさんは、初経のあった日がどんな日であったか、どんな経験をしたのかをしっかりと記憶していた。特にBさんは初経があった日の日付まで覚えていた。一方でAさんの記憶は曖昧であった。年齢や、当時の生活状況、本人の性格、人生における月経をめぐる重要度など様々な要因が記憶へ影響していることが考えられる。例えば、Aさんは「色んなことを深く考えない方」

で、「なるっていうのが」自分の主義だとインタビューの中で話していた。

初経の時期については、Bさんは周囲の同級生と体格も考慮して比較していた。本人だけでなく、学校の担任も責任者として、学級の女子の初経が来ているか気にかけ、把握しようとしていた。初経については三者ともめでたいことだと認識していた。

Bさんは、初潮儀礼として、親が赤飯を炊いてくれた。Aさん、Cさんは自分の初潮儀礼はなかったが、自分の娘に赤飯を炊いた。Bさんの母親は赤飯を炊いて初経を祝ったことに加えて、「おまじない」をしてくれた。Bさんの母親は、月経が辛いものであるという認識から、これから始まる娘の月経の症状が軽くなるように、娘の事を想って初経時に「おまじない」を行ったと考えられる。Bさんは福岡出身で母親は大阪出身であるが、この「軽く済みますように」と言いながらトイレの部分を2、3回往復するという「おまじない」に似た風習に関する記録が愛媛県久万町（現久万高原町）にある。その風習では、初経が来た際は、着物の下づまを三針縫い、雨だれを「月に三日、日は七日」と言いながら、三度往復したという（久万町 2004: 206）。一方Bさん本人の認識としては、既に友人たちには初経を迎えていたために、めでたい感覚や羞恥心というより、「やっと仲間入り」ができたと感じていた。

4.2　月経に関する認識

Aさんは月経について他人とあまり話さないものの、「生理」という言葉を通常使っていた。そして生理用ナプキン登場後、製品名である「アンネ」も月経の名称として使っていたようである。一方でBさんは「生理」、「お客様」、「毎月のもの」との呼び方があり、話す相手や状況によって言い方を変えていた。

インタビュイーは他人と月経について話さないという雰囲気を感じて、あまり話さなかった。Aさんは、「タブー」という言葉について、インタビュアーが使用する前に自ら使用し始めていた。月経がタブーと関連している認識は三者ともにみられた。Bさんは、タブーはあるとしながらも、月経は不浄ではないと認識していたようである。

Bさんは、男性の担任が子どもの月経について子どもに聞くことに対してBさんの母親が嫌悪感をいだいていたと認識している。

本研究の例は、思春期女子において「社会的偏見」「羞恥心」「タブーとしての月経」が複数国で語られていることを明らかにした鈴木らの研究（鈴木ほか2023）に当てはまる。そして、鈴木らが示しているように、インタビュイーらも若い時に月経について話すことは、外部要因によってタブーであり、現在もタブーは残っていると感じていた。月経がタブーである要因として、語りから学校や親、周囲の大人の月経に関する認識や排泄物であるとの認識が影響していることが考えられる。

4.3　月経による心身、日常生活への影響

インタビュイーたちは、月経に伴う心身への影響は少なかったと記憶していた。Aさんは、昔は周囲の人も月経不順や月経に伴う症状は少なかったと認識している。現在の女性は、初経の低年齢化や出産年齢の高齢化、出産の回数の減少などで、生涯の月経回数が増加しており、子宮内膜症の増加と関連するといわれている（武谷・百枝・大須賀・堤 2003）。Aさんの発言は、こういったことの示唆を含んでいるとも言える。

インタビュイーらは月経が生活に大きく影響したとも感じていなかった。しかし、学校の体育への参加や性行為、入浴に影響がみられる場合があった。Aさんは体育を月経によって休むこともなく、同級生で休んでいる人もいなかったが、Cさんは体育を休むこともあり、同級生で休んでいる人もいた。Cさんは月経時、性行為を避けるようにしていた。Bさんは月経量が多い2、3日は風呂に入らなかった。月経中に風呂につからないことは、タブーではなく、浴槽の湯を汚してしまうという衛生観念からであった。

―生理用品―

4.4　生理用ナプキン登場までの月経への対応

インタビュイーたちは、生理ナプキンが登場する以前は、股の部分がビニール製の黒いパンツの中に脱脂綿を当てて、月経時の経血を吸収していた。インタビュイーたちは出身や世代もことなる部分もあるが、使用していたものは共通であった。生理用品の扱い方に関して、Bさんは生理用下着を他の洗濯物とは分けて洗う必要を感じていた。Aさんは下着が他の人には見えない

ようにするべきだとの認識があり、人目につかないように干していた。また、自分が女子であるために、自分のものだけではなく、家のものを洗濯する事が当たり前だという認識を持っていた。このようにAさんの語りからは当時のジェンダー観を垣間見ることができた。

―教育―

4.5　月経に関する学校教育

教育現場での宿泊学習において、月経は教師と子どもともに留意すべき事象であった。約10歳離れているAさんに関しては、小学校、中学校、高校ともに宿泊学習や修学旅行はあったものの、その前に月経に関する授業や説明をされたかは記憶にないとのことであった。インタビュイーたちが受けた月経や身体の仕組みに関する教育は、男女で分けられていた。Cさんが記憶している教育の内容は、基本的な体の仕組みの説明のみであったため、彼女は、さらに深い内容の教育の必要性を感じていた。

子どもを海外の小学校に通わせた経験のあるBさんは、30年前のアメリカのある小学校で、親の同意が得られた5年生に対して、男女一緒に、月経や夢精について話を行っていた経験を語った。日本より性に関する状況が深刻で包括的性教育が進んでいると考えていたアメリカでも、親の同意を得ることができた生徒にのみ性教育を行っていたことから、現場はどの国であっても性教育の実施について悩んでいる事が伺われた。

4.6　長い人生の中の一部分である月経

インタビュイーたちは、月経を自然のこととして捉え、オープンな社会である必要性を感じていた。月経や性について話す事は、個人の人生経験に基づいて月経や性を個人がどう捉えているか、話す空間にいる人との普段の関係性や相手をどう認識しているかに影響される事が考えられた。

月経について昔は周囲の人と話す雰囲気でなく、話すこともなかったと語っていたインタビュイーたちであったが、本インタビューでは月経にまつわる人生経験を赤裸々に話してくれた。その語り口には、月経について話すことに躊躇や羞恥心といった様子は見られなかった。インタビュイーたちの月経

や性について話す事への認識は、年齢のほかに、個人の人生経験に基づいて月経や性を個人がどう捉えているかに影響されている事が考えられる。

また、月経を経験した期間を終え、加齢に伴い様々な経験をした高齢女性にとって、自身にとっての月経は長い人生の一部分であり、月経経験を語ることは、タブーや偏見、羞恥心を超えたものになった事が語りからみられた。生理用ナプキンの登場は様々な技術革新の1つにしかすぎないことも語りから垣間見ることができた。Aさんに関しては、生理用ナプキンの登場も感動したようだったが、それより水道の登場の方が感激していたことが語りやその様子から明らかになった。Aさんは、生理用ナプキンのことを語ったときよりも水道のことについて話している方が語りに勢いがあり、興奮していた。生理用ナプキンの登場は生活用品の向上の一つにすぎず、生理用ナプキンの登場によって、月経がある女性の生活が大きく変化したと予想していた私たちにとって意外であった。インタビュイーらが70年、80年と生きてきて、自分たちの月経経験を様々な変化の中の一つの過去の思い出として出来事を再構築して語っているからこそ出てきた語りだと考えられる。

経血の処理は、当時発売されていて、入手可能な物でうまく対応し、日常生活はその時にできないと思ったこと（体育、お風呂）は休み、状況に応じて、柔軟に対応しており、それが辛かったとの認識は持っていなかった。インタビュイーたちは、このように月経の諸症状やその手間や苦労に対し、それまでの経験を元にその時代でできることをそれぞれに対応して「それなりに」自分たちなりに生きてきた。インタビュイーたちは、月経について、自然のこととして捉え、社会がオープンに変わる必要性を感じていた。

また本インタビューで得られた月経や月経への対処に関する語りから、その人の生き方、考え方を垣間見る事が出来た。自身の身体に関する認識や体調への対処に関する考え方は、70年以上自分の身体と共に社会の中で生きて行く中でそれぞれが自分なりに生き抜く力として身につけてきたことが語りからうかがい知ることができた。

4.7　高齢者女性の語りから得られた各分野への示唆

4.7.1　人類学の立場から

月経は多くの女性にとって人生で毎月経験するものであるため、月経について聞き取りは、その人に半生について尋ねるという意味もあると考える。その意味では、この月経についてのインタビューはライフストーリーに近い点もあると言える。人類学分野で、女性のライフストーリーを分析した研究としては、ネパールのヨルモの女性たちのライフストーリーを聞き取った佐藤の研究がある（佐藤 2015）。佐藤は、ある人が「本当は何をしている・いたのか（傍点原著者）」を明らかにするには、「行為者本人による「（自分は）何をし（てき）たのか」についての報告」が必要であると主張する（佐藤 2015: 28）。そしてある人の「語りを常識的に「わかる」ためにも、彼（女）らの生活環境、社会・文化的背景、さらに個人的背景について可能な限り」知る必要があると述べる（佐藤 2015: 29）。本調査において、調査者の一人である三橋が聞き取りをおこなったのは2年ほど同居している祖母であったため、生活環境や社会・文化的背景、個人的背景などをある程度知った状態で、インタビューを行った。そのため初対面のインタビュアーでは引き出せなかった語りも収集できたと考える。また普段から同居しているからこそ、語られた文脈を理解し分析を行えたと考える。例えば、3.7であげた水道という技術に感動したような語りや、死生観や彼女の性格についての語りがこの例に当てはまる。このように本研究で、月経に直接関わる事象のみを聞くのではなく、その人がどのような人生を歩んできたかを聞き取った上で分析したことは、インタビュイーたちの語りについてのより深い理解に繋がり、月経研究において、十分意義をもたらせたと考える。

祖母であるAさんには、時間をおいて追加インタビューを行っているが、その2回目のインタビューや、インタビュー後の生活において、Aさんの月経に関する語りや行動が変化した。Aさんにインタビューをする前まで、月経についての話題はほとんどなかった。しかし、インタビュー後、Aさんは普段の会話から、テレビで月経に関する番組をやっていたという報告や、月経や性、ジェンダーに関して自分の考えを述べるなど、彼女の行動が変化した。他には、Aさんの月経の語りについて、1回目のインタビューと2回目の

インタビューで異なることがあった。それは月経への認識である。3.7で紹介したAさんの「面倒は、面倒やわなあ」という語りは、1回目のインタビューでの語りで得た。この語りは聞き手である私が、「月経は大変なものであった」という考えを押し付けてしまっている側面があり、Aさんも、「まあそうかな」という程度でしかなく、しっくりきているようにはあまり感じられなかった。次の語りは、追加インタビューで得た語りである。

A：（Aさんの人生における月経が占める割合について）そんなにいいもんじゃないわな、赤飯炊いてお祝いするようなな。そやろ。

このように月経に対して、曖昧な認識から、はっきりと「そんなにいいものじゃない」という認識に変化している。この追加インタビューまでの間には、上記で述べたように、インタビューを受けたことによって、Aさん自ら月経に関係する情報をより能動的に受け取っており、その行動もこの認識の変化に影響しているだろう。

佐藤は、ライフストーリーにおいて、「語るものと聴く（あるいは語らせる）者に間で起こっている相互交渉のありように留意しつつ分析する」ことは必要だと主張する（佐藤2015: 30）。その視点から本インタビューを考えると、その相互作用によって、Aさんは月経についての認識や行動が変化した。そこには、現在を生きる女性としての、時代や関わる人によって変化する月経観や社会観が垣間見ることができる。これはライフストーリーという形で、昔のことを聞き取ったからこそ、如実に明らかになったことではないだろうか。このように本研究において、過去を振り返るという形で複数回にわたる聞き取りを行ったことで、過去を生き抜いて現在も生きる女性の月経経験やその認識についてより迫ることができた。

また、佐藤はライフストーリーにおいて、桜井（2002）にのっとりながら、語りは常に二重の行為に関係すると述べる。つまり、「人生において行われたこととして語られた過去の行為」と「その過去の行為を現在において語っている」行為である。月経についての本調査では、この二重性が現れてくることがあった。上記で述べたAさんの月経の認識についての語りでは、それが顕

著に表れている。最初のインタビューでは、自分が経験した月経の負の影響について曖昧な答え方をしている。最初のインタビュー実施前は、Aさんは、月経や性、ジェンダーに関することに興味を持っている様子は見られず、家でもそのような話をしたことがなかった。この点、最初のインタビュー時のAさんの月経に関する認識は、「過去」の身体経験や認識に近いものであったと言える。一方追加インタビューを行ったときは、Aさんは意識的に月経や性、ジェンダーの話題を聞き、日常会話でもときおりそのような話をすることが増えた。この点、追加インタビューでの語りは、過去の経験を振り返る「現在」の認識であった。

今回のインタビュイーたちは閉経してしばらく経っていて、月経を20年以上経験していない。Aさんだけでなく、Bさん、Cさんも過去の経験を振り返る「現在」の認識という側面が少なからずあっただろう。インタビューでも、度々、「多分」「あまり覚えてない」という発言が見られた。Cさんも次のような発言をしている。

Cさん：やっぱり今日のインタビューで私が過去のことを忘れてるから、お友達に何人かに聞いたんですよ。

このように、本調査で聞き取ったことは、過去の出来事を振り返る「現在」の認識であると言える。彼女たちの語りは、事実ではない思い込みという「現在の認識」として、「昔の本当にあった出来事」として重ならない部分もあれば、「昔の本当にあった出来事」として「現在の認識」と重なるところもあるだろう。しかしそれらが重なったとしても同一ではない。過去のことは、思い出して再構築して語っているからである。このようにこの二重性は、重なる部分や重ならない部分を持つ2枚のくもりガラスのような関係を持つようなことだと言えるのではないだろうか。

4.7.2　保健学（養護教諭）の立場から

日本の性教育・月経教育は遅れているのでは、との視点もある（橋本 2020）。しかし、学校で行われてきた性教育・月経教育は生徒が社会で生きていく上

で困らないように、教員が必要に応じて実施してきた状況であり、インタビュイーらも、宿泊行事前に対処の仕方を教えてもらったり、生徒が困らないように教員が子どもたちの生理について把握していたりしていた。教員は性教育という実存しない概念のプレッシャーや、社会でタブー視されている月経について話すことの難しさを感じつつも、目の前の子どもたちの生活上の困難を軽減させるために月経を含めた個々の状況の存在を包括した集団への指導、個別対応を実施しようと試みていたことが窺われた。

また、インタビュイーは性や月経に関する事がオープンでなく、他の人に話さない状況であった時代に、自分なりの生き抜く力を身に着け、それなりに月経に対応し、性に関する事も自分なりに、解釈し、対応していた。性とは人間の生き方そのものであり、学校における性教育・月経教育と共に社会の中での人間同士の関係性、性・月経の位置づけから考えなければならないものであると感じた。

インタビュイーらは男女分けて月経教育を受けていた時代であり、実際女子のみが受けていた。インタビュイーらの受けた月経教育は不十分であったとの指摘をするのは容易であるが、インタビュイーらが受けた月経への対処が主な目的であった月経教育においては、男子に言う必要性を当時の社会は考えていなかったのではないだろうか。月経についてすべての人が考える社会であるべきだという意識が広まってきている社会になってきたからこそ、月経教育が包括的性教育と関連付けて考えられるようになり、学校ですべての人が助け合う社会を目指し、男女問わず教えられるようになってきたと考える。今まで男女分けて月経教育を行ってきた社会背景、月経教育の目的、人々の認識まで多角的に検討が必要である。

インタビュイーは月経時、内容と体調に応じて参加できるものには参加し、他の人への影響を考えて入浴行為を調整し、性交をしないなどと月経や性については社会との関係性の中でそれぞれ対応しており、学校教育の影響以外の部分が大きかった。逆に宿泊学習が月経と重なった際に、学校側として対応できるように把握したり、生徒が対応できるように教育を行ったりしており、学校教育はあるべき論から教育を行っているわけではなく、目の前の子どもたちがその時の社会的状況の中で困らないようにどうすべきか、という

視点から月経教育を考えており、学校教育が社会の影響を受けていると言える。

月経や性について話すことは恥ずかしいこと、タブーであるという認識が生まれた背景を知ることも重要であるが、今回の高齢者の語りから、その時の関係性の中で社会的一員として月経に対応し、性についても人生の中の一部分で自分なりに経験を通して解釈し、対応して生きる人間の力を学び、あるべき月経教育・性教育はないのではないか、と考えた。一人一人が、社会から受ける自他の生き方への影響を多角的に知り、他者と共に月経・性について語ることそのものが月経教育、性教育ではないかという視点を今回の調査から得た。

4.7.3　共生学の立場から

女性の月経期間は、日本産科婦人科医会によると、12歳から14歳くらいで初経を迎えて、45歳から55歳の間で閉経するまでの約40年間である。厚生労働省のデータによると、日本の女性の平均寿命が87.09歳であることから、全人生のおよそ半分は、月経に直面していることになる。しかし、男性は月経を身体的に体験することはない。

つまり、日本の全人口を対象にして考えると、実際に月経を自らの体に起こる生理現象として実感しているのは、女性だけであり且つ限られた年齢においてのみである。つまり、「月経経験者」はマイノリティといえる。「マイノリティ」の体験や問題を「マイノリティ」の中だけに収めておいて良いのだろうか。

月経を経験している人、経験していた人、これから経験する人、経験しない人、経験している人が周りにいる人、いない人が、月経体験の有無に関係なく、互いに存在を認め合い、尊重し合う共生社会という観点で今回の調査について考える。共生は「民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障害等をふくむ、さまざまな違いを有する人々が、それぞれの文化やアイデンティティの多元性を互いに認め合い、対等な関係を築きながら、ともに生きることを指す」と定義される（河森ほか 2016: 4）。人数の多寡、力の強弱などによって分断されて、支配する集団、される集団に属するものではない。

1950年代頃に初経を迎えた3人は、家庭と学校で月経に関する教育を受け、用品の作成方法や持ち運びについては、家庭で教わっている。初めての月経を迎えた際には、例えばBさんの場合は、赤飯を炊いて家族全員がそれを知るところとなっている。月経は不浄のものとする一方で赤松（2004）によると、大正や昭和初期には、初潮祝いとして親族やムラの有力者などを招いて赤飯などのご馳走を振る舞ったり、近隣の人々や親類に本人が配ってまわったりして、一人前の大人になったことをお披露目したという。

月経時の経血を吸収する用品としては、布製のあてものを洗濯して干して何度も使用していた時代には、物陰に干そうとも家族の目には触れたであろう。今日、SDGsの観点などから、布ナプキンの利用者は増えているとはいえ、まだまだ少数派である。今回のインタビュー対象者が初潮を迎えた当初は、使い捨ての既製品は登場していなかったのであるから、月経のある女性がいる家庭では、それらが干されている光景は日常的であったと推測する。そして、対象の3人が過渡期に経験したように、使い捨ての手作りのカット綿から市販のものに移行し、技術革新の恩恵で現代ではさらに高品質となり、経血の漏れもなく長時間使用できる製品が簡単に手に入り、使用後は簡単に処分することができる。医療の進歩によりPMSの症状への対処療法としての鎮痛剤やピルなどが普及し始めて、身体的精神的な苦痛から解放されるという喜ばしい時代を迎えた。しかし、月経への対応が容易になり、月経がもたらすデメリットをコントロール出来るということは、裏を返すと、「月経」が社会から不可視化されることによって「ないもの」にされやすい状況となり、自分自身や他者への配慮や思いやりの必要性を感じにくくなるのではないだろうか。つまり、女性の体で生じる月経に関する様々な症状を軽減するために医療的な介入が行われ、スーパーマーケットやドラッグストアでナプキンが見えないようにする配慮が行われ（「No bag for me」プロジェクトが果たした役割は大きいが、すべての人に浸透したとは言えない）、高性能な生理用品の開発は、長時間でも経血の漏れを心配せずに日常生活を送ることができるということは、誰の目からも「月経」が見えなくなることを意味する。また、「月経」というものは「コントロール可能」というラベリングがなされることによって、いかなる方法によっても月経の身体的・精神的苦痛から逃れられない人

に対して「他の女性が乗り越えられるのに、なぜあなたにはできないのか」という無言の圧力にもなりかねないと懸念している。先に言及した「共生」社会を我々が追求すべきだとしたら、性別や年齢など関係なく、すべての人が自分以外の人を認め、対等な関係を築き、共に生きるべきところが、技術革新や医療の進歩によって逆に覆い尽くされてしまっている。そして、個人用のデバイスから簡単に「情報」にアクセスが可能となり、社会の中で対話が失われ、隣人に目を向けなくなっているのではないか。一人一人が、今だけではなく、過去に何を経験し、何を思ったのかを知ろうと努める営みの重要性を考えると、今回のインタビューは意義がある。

Cさんは、3.7で紹介したように、月経のみならず、ジェンダーや平和などあらゆるテーマについて人々が話し合い、理解し合い、生命を尊重できるような社会を追求したいと述べている。未だに語ることがタブー視されているのも事実だが、人類の約半数がいずれ経験し、今現在経験し、過去に経験したこの月経にまつわることを、月経を経験した人生の先達が後進に経験と思いを語ることで、私たちは彼女たちが生きた時代を知り思いを馳せることができる。昭和の時代よりも令和の方が、月経に対処する方法が優れていて、昔の人は苦労した、と一刀両断する前に、まずは過去を生き抜いた女性たちの経験を我々が聞き取り、想像力を働かせることから始めることによって、単に女性の身体的な現象という意味での月経にとらわれず、月経というイベントを通して、その人の人生そのものに触れることになる。結果として共生社会が構築されることが期待できる。

6　結論

調査前、筆者たちは月経に関する講義を受講していたため、高齢者女性の月経に関する認識は、タブーや文化・慣習に影響を受け、生理用ナプキンの登場まで、大変だったのではないかと思い込んでいた。しかし調査を行うと、確かに苦労があったものの、実際インタビュイーたちは自分が生きてきた時代、文化、社会の中で、彼女たちなりに強くたくましく生き、月経を自然のことと捉え、生きていた。生理用ナプキンの登場までも、その時に手に入る

もので工夫して生活し、そんなものだろうという感覚で、その時の状況に対応し、「それなりに」やってきていた。これは、ライフステージのほとんどを重ねてきた高齢の女性たちに質的なインタビューをしたからこそ見えてきたと考えられる。このような語りは、月経にまつわる経験を過去のものとして捉えなおしたものであり、過去の月経対処がどのようなものであったかという事実を知る以上の価値がある。月経を終え20年以上たった女性の月経にまつわる語りから、現在の月経や月経を取り巻く状況について多角的に考えることができ、今後の社会の方向性を検討することが可能である。今後の課題として、調査対象者たちの高齢化によって語り聞けなくなる状況があるため、さらに多くの高齢女性へのインタビューをすることによって、人生における月経に関する認識を調査していくことは重要であると考える。

また調査を終えて、個々人がどのように感じているかを思い込みなく、理解しようとする試みが必要であり、そのためには生の声を聞き、そこから学んでいく姿勢が重要であると考えた。月経教育、包括的性教育の重要性が指摘されているが、個々人が作っている社会が、月経を当たり前のこと、自然のこととしてとらえ、一人一人が他者に思いをはせ、想像力を持ち、自他の命を大切にすることができれば、月経が恥ずかしい事でもタブーでもなくなり、すべての生物が尊厳を持って生きることができるようになると考える。

注

1　この調査のきっかけは、筆者たちが所属する大阪大学の国際協力学特講という授業であった。この授業では、生物学的に女性である人の身体に起きる月経という生理現象の社会的側面について、文化やジェンダー、国際協力など多様な角度から考察を行った。そしてその授業内でグループ研究として、このインタビューが実施された。

2　Aさんの家では、必ずしもではないが、祝いごとがあったら赤飯を炊く。

3　前後の文脈として、Bさんが初経の来た日を正確に覚えていることに対して、聞き手が「なぜそこまで正確に覚えておられるんですか」と尋ねている。

4　Bさんは病気のため、子宮を摘出しており、「その時」はこのことを指す。

参照文献

赤松啓介
2004 『夜這いの民俗学・夜這いの性愛論』筑摩書房。

岩﨑和代・串谷由香里
2019 「看護系大学生の月経と対処行動や学業との関連」『東都医療大学紀要』9（1）41-50。

緒方妙子・宇野亜紀
2011 「女子学生の「月経の捉え方」と「月経痛及びセルフケア行動」との関係」『九州看護福祉大学紀要』11（1）: 3-9。

緒方妙子・大塔美咲子
2013 「大学生の月経前症候群（PMS）と日常生活習慣及びセルフケア実態」『九州看護福祉大学紀要』13（1）: 57-65。

甲斐村美智子
2010 「女子学生の月経の経験と自己肯定感 : 初経教育およびその後の月経の経験と自己肯定感との関連」『女性心身医学』14（3）: 77-284。

甲斐村美智子・上田公代
2014 「若年女性における月経随伴症状と関連要因がQOLへ及ぼす影響」『女性心身医学』18（3）: 412－421。

河森正人・栗本英世・志水宏吉編。
2016 『共生学が作る世界』大阪大学出版会。

菅野美佐子・松尾瑞穂
2022 「インドにおける月経の対処とその変化―月経をめぐる開発と不浄観念のせめぎあい」杉田映理・新本万里子編『月経の人類学　女子生徒の「生理」と開発支援』pp.146-166、世界思想社。

久万町
2004 『久万町誌　補訂版続編』岡田印刷株式会社。

桜井厚
2002 『インタビューの社会学 : ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

佐藤麻美・斉藤ふくみ
2010 「女子大学生の月経の実態調査―月経のとらえ方を中心に」茨城大学教育実践研究 29: 213-222。

佐藤斉華
2015 『彼女達との会話―ネパール・ヨルモ社会におけるライフ/ストーリーの人類学』三元社。

神谷桂・谷津裕子
2007 「成人女性の月経についての語り」『日本赤十字看護大学紀要』21: 82-88。

杉田映理
2022 「ウガンダのMHM支援策は月経をめぐる文化を変化させたのか―ウガンダ東部地域のローカルな実態に着目して 」杉田映理・新本万里子編『女子生徒の「生理」と開発支援』世界思想社、pp.193-216。

鈴木明子
2013 「月経の名称―現代の月経―」『跡見学園女子大学文学部紀要』48: 133-146。

鈴木瞳・濵田ひとみ・大田えりか
2023 「思春期女性における月経の心理・社会的問題に関するスコーピングレビュー」『日本助産学会誌』37（2）: 100-113。

武谷雄二・百枝幹雄・大須賀穣・堤治
2003 「子宮内膜症の疫学的背景」『産婦人科治療』86（6）: 1022-1027。

田中ひかる
2019 『生理用品の社会史』角川ソフィア文庫。

新本万里子
2022 「国際開発の対象となった月経の文化人類的課題」杉田映理・新本万里子編『月経の人類学　女子生徒の「生理」と開発支援』世界思想社、pp.50-60。

西岡笑子
2018 「我が国の性教育の歴史的変遷とリプロダクティブヘルス/ライツ」『日本衛生学会』73: 178-184。

野田洋子
2003 「女子学生の月経の経験第1報　月経の経験の経時的推移」『日本女性心身医学会』8（1）: 53-63。

橋本紀子
2020 「性と性教育をめぐるわが国の現状と課題」『保健の科学』62（4）: 220-224。

平田まり
2011 「若年女性の月経痛に対する鎮痛剤の使用実態と教育的課題」『学校保健研究』 53（1）: 3-9。

本田知佳子・我部山キヨ子
2016 「更年期を迎えた女性の月経に対する認識の変化」『日本助産学会誌』0（1）: 131-140。

松井弘美
2014 「システマティックレビューによる思春期の性感染症の予防教育の検討」『小児保健

研究』73（6）: 836-844。

宮澤洋子・富永国比古・土田 満
2013 「青年期女性における月経前症候群（PMS）の実態について」『瀬木学園紀要』(7）: 18-25。

渡邊香織・奥村ゆかり・西海ひとみ
2011 「女子学生における月経随伴症状と月経サポート機能，およびセルフケアとの関連」『日本女性心身医学会』15（3）: 305-311。

Buckley, T., & Gottlieb, A.
1988 Blood magic: The anthropology of menstruation. Univ of California Press.

Leung H, Shek DTL, Leung E, Shek EYW.
2019 Development of contextually-relevant sexuality education: Lessons from a comprehensive review of adolescent sexuality education across cultures. *International journal of environmental research and public health*, 16(4), 621.

Mason-Jones, A., Sinclair, D., Mathews, C., Kagee, A., Hillman, A. & Lombard, C.
2016 School-based interventions for preventing HIV, sexually transmitted infections, and pregnancy in adolescents
https://www.cochranelibrary.com/cdsr/doi/10.1002/14651858.CD006417.pub3/full?highlightAbstract=prevent%7Cbased%7Cinterventions%7Cpreventing%7Chiv%7Cschool%7Cfour%7Cfor%7Cintervent%7Cbase（2024.01.25アクセス）

ウェブサイト

厚生労働省「令和４年簡易生命表」
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life22/index.html（2024.1.22アクセス）

日本産婦人科医会
「初めての生理（初経）はいつごろに始まりますか？」
https://www.jaog.or.jp/qa/youth/shisyunnki09/（2024.05.26 アクセス）

「更年期障害について教えて下さい。」
https://www.jaog.or.jp/qa/menopause/%e6%9b%b4%e5%b9%b4%e6%9c%9f%e9%9a%9c%e5%ae%b3%e3%81%ab%e3%81%a4%e3%81%84%e3%81%a6%e6%95%99%e3%81%88%e3%81%a6%e4%b8%8b%e3%81%95%e3%81%84%e3%80%82/（2024.05.26 アクセス）

UNESCO
2018 International technical guidance on sexuality education: an evidence-informed approach
https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000260770（2024.01.25アクセス）

RESEARCH ARTICLE

The Society through Menstruation and the Experiences Related to Menstruation ：Narratives of Elderly Women

MITSUHASHI Ryoko, ITO Miho, OZAKI Akiyo, NI Tingting

Abstract

The purpose of this study was to qualitatively identify the menstrual experiences of women who are now elderly, their thoughts about menstruation, and their perceptions of society that were formed through their experiences related to menstruation.

The research method involved face-to-face semi-structured interviews with three women in their 70s and 80s. The results revealed that the interviewees adjusted their lives according to their menstrual flow, and lived in their way according to their circumstances, making do with what was available at the time. Although sanitary napkins have made life more convenient, for these women, the appearance of them was just one of many conveniences, and menstruation was only a part of their lives.

We were also able to hear their thoughts on society through experiences related to menstruation. Thus, through the interviewees' stories, we were able to understand how they coped with menstruation at that time, their thoughts about menstruation after living through their lives, and the social conditions that surrounded them.

Keywords : **menstruation, elderly women, taboo, menstrual view, interview, women, sex, narrative, menstrual experiences, sexual education**